

## 令和2(2020)年度 第2学期始業式 式辞

全校生徒諸君、おはようございます。

本校としては、社会情勢を見ながら、段階的に諸君の学校生活を本来の形に戻していく措置をとってきましたが、いよいよ本日から全校生徒諸君が一斉に登校することとなりました。感染症対策をふまえた“新しい生活様式”のあり方をしっかりと意識しつつ、安全な学校生活を送っていけるよう、皆さんひとり一人の具体的なかつ積極的な行動に期待したいと思います。

この8月は、例年以上に暑さが堪える日々でした。猛暑日や熱帯夜の多さもさることながら、炎天下でもマスクの着用が求められ、さらに行動の自粛も必要とされる中で、身体的な負荷に加えて精神面で被ったストレスが大きかったのは言うまでもありません。

この長く続く自粛ストレスの中で、皆さんの様子を見てきて、懸念していることが実はひとつあります。誤解を恐れずに申しますが、それは、皆さんが、聞き分けが良すぎるのではないかということです。もちろん、この状況下ですから、冷静で現実的な判断が求められるのは当然です。意味もなく反抗的になることを奨励するものでは、決してありません。しかし、はじめから思い通りに事が運ばないと決めつけて、可能性を追求しないのは、むしろ危険を伴うものだと考えるのです。社会の趨勢を見通して、物わかり顔で、忖度することは、見方を変えれば、外からの圧力をそのまま受け入れることであり、そのストレスは、一方では自分をネガティブな方向へ追い込んでいくことになり、そのことは逆に、他者への理由なき攻撃の契機にもなり得るのではないかと思います。納得がいけないことがあったら、ひとつひとつ引っかかって、ぶつかってほしい。また、迷ったり悩んだりすることに、蓋をしなくてほしい。納得できない自分を正面から見据えることで、他者が抱える問題への想像力を得ることができ、そこに相互理解が生まれてくるのではないかと思います。

また、夏は祈りの季節です。終戦後75年が経ち、戦争を知る世代が日本の人口の約15%まで減少し、その平均年齢は82歳に迫っていると言います。長年語ることを拒否してきた戦争体験者たちが、近年、その重い口を開き始めたと言われてきましたが、今年の報道等を見るに、その年老いた語り部たちも急激に減ってきているように感じます。戦争の記憶を伝えていくこと～そもそもそれは必要なのかという議論もなされているようですが、諸君はどう考えますか。必要であるとすれば、どのように伝えていくべきであると考えますか。翻って、今般のコロナとの戦いは戦争であるとよく言われていますが、この言説にはどのような意味があるのでしょうか。悲惨な状況に便乗して支配を強める資本の動きを指摘する向きもあるようですが、これはどう評価されるべきであると思いますか。

いずれにしても、他者への優しさは持つべきであるし、平和は求め続けられるべきだと考えます。若い諸君には、健全な批判精神をもって社会と対峙していくことを期待しています。

さて、この2学期は、高校3年生にとってはいよいよ大学受験に向けて身を入れていく時期になりますね。受験勉強に集中する時期というのは、自らの学ぶ姿を省みながら自分の弱さと向き合う中で、実は、もっとも感受性が磨かれる時期であり、その分、視野もどんどん広がると私は考えています。だから、目の前の自分の課題に対して、誠実に力を尽くしていけば、想定以上に成果が表れていくと思います。受験制度の改定が、具体的にどのような影響を及ぼしてくるかはこの期に及んで未知数な部分がありますが、それでも、諸君が本校

で学友と共に培った、基本を大切に自ら考える力を養うという姿勢を持ち続ける限り、どんな課題にも対処できるはずです。諸君はいよいよこれからどんどん伸びていきます。自信を持って取り組んでください。

また、高校2年生とその後続く諸君は、君たちの自治による行事や課外活動に、コロナ禍の影響がどこまで及ぶかということに、まだまだ向き合っていかなければなりません。その意味では、この2学期は正念場であるように思います。文化祭はどのような形で実現できるか不透明なところが大きいですし、部活動も大会や夏合宿などが例年通りできていないという現実において、諸君には、工夫を重ねて、例年に遜色のない学びを得てほしい。そして、本校で長年培われてきた自主独立の気概を、受け継いでいくように考え抜いてほしいと切に願っています。

中学1年生諸君は、やっとのことで、この駒場東邦で同期生が揃って一日を過ごすことができるようになったわけですね。夏休み中に意中のクラブに入部して、もう駒場生活を謳歌している人もいるでしょう。頼もしい限りです。一方で、何となく気後れして、機会を逸してしまっている人もいるかもしれません。でも、まだまだ大丈夫です。部活動に限らず、日々の授業においても、学校行事や学年行事においても、この際マイペースで、じっくり腰を落ち着けて、徐々に自分なりの過ごし方を獲得して行ってください。

皆さんも注目していることと思いますが、人工芝のグラウンドが間もなく完成です。校舎や設備が更新され、そこにまた君たちの手で新たな歴史が刻まれていくわけですが、ずっと変わらず、駒場東邦生の学びを支援してくださる方々の輪が、受け継がれてきていることに、思い至ります。感謝の気持ちは、皆さんが伸び伸び学ぶその姿によって表されるものと思っています。

以上をもって、式辞といたします。

令和2(2020)年 8月 31日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦